
幻想童話

保地葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻想童話

【Zコード】

N7124D

【作者名】

保地葉

【あらすじ】

童話パロディ。微エログロ、差別的表現がありますので考慮ください。

「赤ずきん」よつ。

紅帽子

あるところに朱帽子を被る少女がいた。

少女は母に用事を託され祖母の家に行く途中に暴行されその際流れた血が少女の衣服に染み込みその布を用いて祖母が朱帽子を縫つたのである。少女の村に古くから伝わる風習だった。

朱帽子を被る者は村人と口をきくことは出来ない。朱帽子たちは朱帽子を深く被り伏目がちに歩いた。朱帽子の者たちはこの村を出ること無く死んで行くのである。

朱帽子の少女は母の言い付けで毎日祖母の家を訪れた。母は汚れた娘を罰していった。言い付けを守らせることで村人の目に娘を触れさせ、辱めていたのである。

娘は捷通り母とも祖母とも口をきかず毎日村を歩いていた。

閉鎖された村に旅人が訪れた。旅人は人懐こく様々な事を訊いて回る。朱帽子のことも聞き及び、偶見掛けた朱帽子の少女に声をかけた。

朱帽子の少女は困惑したが、旅人が村人で無い事を知るにしばらくぶりに口を開いた。朱帽子の少女はゆっくりと言葉を紡ぐ。旅人は朱帽子の少女を気に入った。

朱帽子の少女と旅人は頻繁に会つ仲になつたがそれを良く思わないのが少女の母である。

母は少女を罰していたのに少女は日に日に朗らかになつていてのを見、旅人を邪魔に思つた。母は少女の父に相談すると父はならば旅人を亡き者にしてしまえばいいという。母はなるほどと納得し早速旅人の飲み物に毒を盛つたのだった。

母に旅人への飲み物を託された朱帽子の少女は、母の明るい表情を見て訝しみ飲み物を父の杯に注ぎ渡した。

父は知らず杯を飲み干し血を吐いて倒れた。父の鮮血を受けた朱帽子の少女は衣服を赤く染めたまま旅人の元へ走り今までの事を告げた。

話を聞いた旅人は朱帽子の少女の母の元へ急ぎ母を刺す。そして朱帽子の少女を連れその場を後にする。

旅人と少女は赤い衣服のまま村外れの朱帽子の少女の祖母の家を訪れた。

少女の祖母は何も言わず一人の赤い布で二つの朱帽子を縫つた。旅人と少女は揃いの朱帽子を被り村を出たのである。

その村は未だひつそりと朱帽子を縫い続けているという。

紅帽子（後書き）

HP（携帯推奨サイト）で公開中。

ハロメ、笛吹き女（前書き）

「ハーメルンの笛吹男」
「サロメ」より

ハロメ、笛吹き女

ハロメは村唯一の娼婦である。口淫を得意としたので称讃と侮蔑から笛吹き女と呼ばれていた。

ハロメは村一番の嫌われ者である。しかし夜も昼もハロメの元を訪れる客は絶えなかつた。

ハロメはいつも美しくしていた。豪華な衣装で着飾るのではない。高価な化粧を施すのではない。ハロメは家の裏から湧き出る水を飲み、身体を清め、衣服を洗つた。ハロメの内に入つた水はハロメを輝かせ、外を拭つた水はハロメを瑞しくした。濯がれた衣服は光沢と陰影を持ち、ハロメを美しくしていた。

ハロメは笛吹き女だつたので、村中の女たちから嫌がらせを受けた。ハロメに食物を売る女は無く、ハロメに唾を吐く女は多い。時にハロメは飛礫を投げられたが、ハロメの美しさは虐げられることはなかつた。ハロメの態度は毅然としたままであり、食物はハロメの客たちが少量ながらも持ち寄つたために飢えることはなかつた。

ハロメは有償の愛を男たちに与え、男たちは伴侶では得難い悦楽を得る。しかしハロメは男たちに安樂を与えることはない。それが男がハロメから離れられない理由であり、また、男がハロメに一定の距離を置く理由だつた。

村中の男がハロメに惹かれたことに無理はない。ハロメは娼婦でありながら淑素としていたのである。

ハロメは何人かの男の子を身籠もつたことがある。月が満ちハロメは子を産み、村の寺院に預けた。

ときに子は村の夫婦に養子として引き取られる。子の養父はハロメの客であつたりする。

ハロメの子は村の男たちによつて出自は伏せられていたので、ハロメの子たちは養父母の元で健やかに育つた。

ハロメは美しい笛吹き女だつたが、それでも年老いてくる。ハロメの最後のこどもは未だ赤子だつたが、最初のこどもは成人していた。ハロメは客取りを少しずつ抑え、ゆつたりとした生活を送ろうとしたが、村の女たちの嫉妬がそれを許さない。

貯蔵庫は荒らされ、湧き出る水を濁され埋められた。その度にハロメは貯蔵庫を建て直し水の湧き口を整備したが、女たちの悪意にハロメの仕事は追いつかない。年輪を重ねた体は体力を失いつつあつた。

安寧を求めるハロメは、村の首長の元へ訴えに訪れる。

村の首長は好色だつた。何人もの妾を抱えていたが、ハロメには手を出したことはない。女は買うものではない、貢ぐものでもない。財力と権力、器量が首長の自信を作つていた。

村の娼婦が訴え出たことに首長は眉をしかめたが、役目として謁見し、一目で欲望が動いた。ハロメが何一つ言わないうちに首長は願いを聞き届ける条件を出す。すなわち、一夜を共にしろと。ハロメは無表情のままに踊るようにヴェールを翻し立ち上がつた。年を経たとは思えない軽やかさで首長に歩み寄る。

七つのヴェールを脱ぐとき、首長は既にハロメの虜になつていた。ハロメは水のようにとくとくと湧き、しつとりと首長を包んだ。ときには水のようになにかみどりのなにに溺れた。

一夜明け、首長はハロメに願いを聞こつと申し出る。ハロメは言つ。安穩とした日々を、と。

首長は願いを聞き入れ、ハロメの家に守衛護衛としてひとりの青年とひとりの娘を遣わす。それは期せずして、ハロメの子らであつた。

ハロメは「じもたちに母と名乗り出ることはなかつたし、こどもたちが母と呼ぶこともない。力仕事をした彼の足をハロメが濯いだが、それが性的に発展することはなかつた。ハロメの元に時折客が訪れ

たが、彼女が応対することも求められることもなかった。

ハロメは一日に一度、茶を淹れる。それは香り高く柔らかに苦味を感じた。

それはわずかながらの安穏の日々となる。

村の女たちはハロメの安穏をよく思わない。首長の女もそうだった。ハロメに心を奪われた首長を見、ハロメへの嫉妬心が高まる。

ある晩、ハロメは幾人もの覆面の女に襲撃される。

守衛と護衛をしていた男は、覆面の女に首筋に刃物を沿わされながら命が惜しければ共にハロメの元で働いていた娘を犯せと言われる。娘は明らかに、ハロメに似ていた。ハロメの元で過ごすようになってからは特に美しさが際立っていた。

ハロメは女たちに押さえ付けられながら、息子が娘を汚す場面を見せつけられた。女たちは彼がハロメの息子だとは知らず、ただハロメの娘を傷つけることでハロメの心を抉りたかった。彼は死ぬことへの恐怖とハロメへの嫉妬が勝った。目の前にいるハロメに似た美しい娘を汚すことへの欲求があった。娘はハロメへの憎しみが増えた。

鬼神のように暴れ抗うハロメの前で行為は終わる。気力体力ともに果てたハロメは、終にぼそりと真実を口走る。

事実を知った覆面の女たちは恐れおののき逃げ帰る。残つたのはハロメと息子と娘である。

ハロメは呆然としていた。

これは報いなのだろうかと考えていた。娼婦とし笛吹き女として過ごした報い。子を宿しながらも母として育てなかつた報い。

だけれどもこどもたちに一体何の罪があるうか。

ハロメはゆるゆると立上がり、娘を寝台へと運んだ。息子が言われるままに水を汲んで持つて来た。ハロメは娘の体と息子の体を拭つた。水は一人の肌をすべらかにさせたが、二人の心を戻しはしないのだ。

「こどもたちに一体何の罪があるつか。」

「母の報いを子が受けたのだ。
では。

ハロメは鉈を手に取り、夜明けを迎えた村へ出た。ハロメは首を撥ねて回る。

男にも女にも手を出さず、ただこどもだけを撥ねた。その日の正午、村のこどもは皆死んだ。ハロメは踊るように崖から身を投げ死んだ。

こどもを失った村はすぐに寂れ、村人は次々に姿を消す。一年後、村に住むのは一組の父と母とこどもだけである。

誰もいない村のはずれの粗末な家で、若い父母が茶を飲んでいる。ひとりのあかごが母の腕に抱かれ眠っている。家の裏で水だけが変わらずにこんこんと湧いている。

ハロメ、笛吹き女（後書き）

HP掲載済み

ヘルゼンとグレーテル（前書き）

「ヘンゼルとグレーテル」より

ヘルゼンとグレエテルン

ヘルゼンとグレエテルンは月明りを頼りに宵闇を彷徨つていた。ヘルゼンの落とした砂金粒は波にさらわれ見つかるわけもなく、長く入組んだ海岸線をどこへ行けばいいのか見当も付かない。その上グレエテルンが泣き続ける為にヘルゼンの苛立ちを一層助長し、方向感覚を鈍らせるのである。

果たして家に帰れるのだろうかとヘルゼンは不安になる。一度は帰り着いた家路だが、今はただ目印を失い彷徨うばかりである。それもこれも、グレエテルンが悪いのだ。

ヘルゼンはそう思つたが口には出さない。

この状況では一人より二人のほうが得策である。利用出来るものは利用するだけしてから削除すればいい。ヘルゼンは口には出さない。

ヘルゼンはなんとか前回辿つた道を探し当てようとしていた。そこにはまだ貝殻の目印が残つてゐるはずである。

あの母王が回収していなければの話だが。

ヘルゼンは嫌な考えに首を振る。ヘルゼンは聰い少年だったのありとあらゆる可能性を思い浮かべることが出来た。

いや、母王はそこまで頭が回るまい。母王は自分の命だけが惜しいのだ。

己の考えを打ち消しヘルゼンは泣き続けるグレエテルンを背に歩き続ける。

ヘルゼンとグレエテルンは父王と母王の間に産まれた兄と妹だった。もしかすると姉と弟かもしない。自分の出自の順についてヘルゼンは尋ねたことはない。グレエテルンは疑問にすら思わない。精神的成長を鑑みればヘルゼンは兄でグレエテルンは妹だった。父王と母王はそれぞれがそれぞれの国を持つ王族である。父王の伴

侶である妃には父王の後継である男子が居、母王は伴侶である國主との間に後継として男子を産んでいた。父王と母王は互いに敵対する国でありながら密通し、ヘルゼンとグレーテルンを産んだのである。

どちらの国にも居場所が無いヘルゼンとグレーテルンは、国都から遠い岬にある王族の別荘に何人かの奉公人と父王と母王からの心ばかりの金で住んでいた。

あるとき母王は一人が住む別荘に住みたくなり、ヘルゼンとグレーテルンを追い出すことにする。父王は反対したが、母王は一人にそれ相応の金子を持たせれば良いだろうと押し切つた。一人を慮つた父王は何でも一人の欲しいものを与えると言つたがヘルゼンとグレーテルンは今まで通りの暮らしをと望みいやそれ以外のものならばと父王が言いならば、とヘルゼンがとても無茶な望みを言った。

それを聞いた母王は青褪め、ヘルゼンを珍しいものを見せてやると連れ出し見知らぬ場所に置き去りにした。

こんなこともあろうかと月明りを反射する貝を拾い集めていたヘルゼンは道すがらその貝殻を落とし、母王に置き去りにされてから夜を待ち月明かりを利用し貝殻を目印に家に帰つて來た。

驚いた母王は再び甘言で持つてヘルゼンを連れ出そうとしたが上手くいかず、ならばとグレーテルンを使ってヘルゼンとともに連れ出し見知らぬ場所に置き去りにした。

ヘルゼンは前に連れ出され貝殻を目印に帰り着いたとき、グレーテルンにこういうことがあるだろから目印になるものを集め身に着けておくよう、と説いていた。しかしどうやらヘルゼンの用意したものは小瓶いっぱいの砂金粒だったのである。

ヘルゼンは道すがら砂金粒を落としたが夜が暮れて月が出ても目印になることはなかつた。

それでもヘルゼンは少しでも手掛かりを見つけようと、いつしか海の中に踏み入るまで探し続けているヘルゼンは膝辺りまで海に浸か

り目印となる砂金粒を探し、グレエテルンは泣きながらヘルゼンの後を付いて回った。

ヘルゼンは聰い少年だったが、グレエテルンは美しい少女だった。ヘルゼンは自分の聰さを知っているが故に一つの考えに没頭する節があり、グレエテルンは自分の美貌を知っているが故に何も出来ない少女だった。

ヘルゼンが夢中になつて海を搔き回しているうちに高波が起つり、あ、と言う間もなく一人は波に呑まれ海へと引きずり込まれた。

次に二人が目覚めたとき、目の前には一軒のみすぼらしい小屋がある。ヘルゼンとグレエテルンはふらふらと小屋に入つて行く。

ヘルゼンとグレエテルンの前には豪華な食事の用意があった。

みすぼらしい小屋は炊事場と洗濯場と掃除場と裁縫場だった。空腹だったヘルゼンとグレエテルンはそれぞれ無言で食物を口に運ぶ。そのとき小屋の窓から女が飛び込んで来た。

お前たちは誰だ何をしているのかどうしてここにいるのか何を食べているのだ。

と問い合わせと怒りを同時に話した。

あなたこそ誰なの、とグレエテルンは問い合わせ返したところ、

自分の名も名乗らずわたしの名を訊くのか断りも無く人の家に侵入し勝手に食事を摑りそれを謝罪する事なくわたしの名を訊くのか。

と女は怒りに言葉を紡ぐ。

黙り込んだグレエテルンに代わり口を開いたのはヘルゼンである。

本当に申し訳ない、僕はヘルゼンでこちらはグレエテルン、こういう事情で波に呑まれ気がついたらここに居た、あまりにも空腹だったので料理を食べてしまつた、謝つてすむ話ではないが食べてしまつた分は労働でも何でも償いをする。

とヘルゼンは丁寧に謝罪した。

誠意を尽くしたヘルゼンの言葉に怒りを露にしていた女も落ち着きを取り戻し、それは気の毒なことですここに辿り着いたのは幸運でした、と穏やかに言つた。

女の変り様にグレエテルンは機嫌を損ね、ヘルゼンはこの場を繕つ最善の方法について考え、ヘルゼンはグレエテルンに女に謝り損害を償つことを申し出る様説いた。

しかしグレエテルンはこんな身分の分からぬ女に頭を下げたくはない。自分は二つの王族の血をひく娘なのだ。グレエテルンには高慢な自尊心があった。

女は一人の様子を見、溜息を付いた。

美しい子グレエテルンあなたには何を言つても無駄な様ですね、聰い子ヘルゼンあなたに償いの為に旦那様の元で働いて貰いましょう。

と女は言つ。

わたしは旦那様に仕える者です、あなたがたが食べた食事は旦那様のもの、夕餉を運ぶ際にあなたを旦那様のところへ連れて行きましょう、旦那様の元で償いをなさい。

と女は提案する。

ヘルゼンはそれで解決するならばと承諾し、グレエテルンはヘルゼ

ンと離れることだけを不安に思つていた。

その夜グレエテルンは一人みすぼらしい小屋に残された。ヘルゼンは女と出て行つたまま帰つて来なかつた。

グレエテルンは小屋を回り炊事場に残された料理をしぶしぶ口に運ぶ。裁縫場と洗濯場から柔らかく綺麗な布を集めると小屋の中央に敷き詰め寝台にした。一糸纏わぬ姿になるとグレエテルンは眠りにつく。

グレエテルンが目覚めたのは夜も白む頃、女の怒声であった。女はグレエテルンに何をしているのだと叫んだ。

それは旦那様の衣服に寝具の布であるお前の寝具ではない。

グレエテルンはわたしの寝具が無かつたのだもの、仕方なく借りたのよ、それともわたしに床で寝ろと言つの、と苛立つた。

美しい子愚かな子グレエテルン、この家物はお前のものではなく旦那様のもの、お前は物を使うどこのかこの家に入ることも許されていない、自分のしたことの代償を払う気も無い愚かな子よここから立ち去れ。

と女に言われたグレエテルンはわたしは一つの王族の娘、国にあるものは王族のものだわ、と言い返した。

女は荒立てた気性が落ち着くようにふう、と息を吐く。

美しいけれど愚かな子あなたは何も知らないのか知らうとしないのか。

わたしはあなたがたについて少し聞いたことがある、と静かに語り始める女の話を未だ苛立ちを納められぬままグレエテルンは黙つて

いる。

岬の屋敷に住む少年と少女の話、人々と接点を持たない何人かの奉公人があり、極たまに貴族らしき人が訪ねて来る屋敷、それがあなたがたのことでしょう。

と女はグレエテルンに言った。そうよ、わたしは王族の娘だわ、と言つグレエテルンに、

美しいけれど愚かな子あなたは何も知らない知るうともしないのですか、知るべきことすらもならばあなたには旦那様の元にいる資格がない早々に立ち去りなさいさあ早く。

と女は続けた。

何を知らないというのです、とグレエテルンは訊いたが、美しいけれど愚かな子知るべきことすら分からぬのですね、と女の力は強くグレエテルンは小屋から出されてしまう。グレエテルンは小屋の扉を叩いたが開く気配はない。仕方なくグレエテルンはヘルゼンの名を呼びながら辺りを歩き始めた。

しかしヘルゼンは現れるはずもなく、力のないグレエテルンは砂浜に疲れて座り込む。グレエテルンは気力を無くし飲まず食わず眠らず何もせず座り込んでいた。

どれほど座り込んでいたどうか、グレエテルンは笑い声を聞いた。声はヘルゼンのものである。

グレエテルンはふらふらとヘルゼンの声へ歩く。途中足をとられ転び砂だらけになりながらグレエテルン行く。

笑い声はヘルゼンのものだけでなく複数あつた。たくさんの少年と少女の声が遠く遠く聞えて来る。

ああ、ヘルゼン、待つて。グレエテルンはそう言つたはずだが出た

声は嗄れた掠れ声だつた。ヘルゼンの若く嬉しげな声とは全く違つ、そのことに気付き愕然となる。

グレエテルンが自分の両の手を見ると傷一つない白魚の様であつた手がぼろぼろと流木のよつに皺枯れている。どうして、とグレエテルンが呟いたとき田の前に屋敷が現れた。

グレエテルンは半ば這う様に屋敷に辿り着き、扉を叩く。応答し扉を開けたのはあの小屋の女だつた。

女はグレエテルンを一瞥し、どうぞお引取りを、とだけ言い扉を閉めようとする。なんとかグレエテルンは扉に体を割り込ませ旦那様とやうに会わせなさい、と言つた。

あなたには旦那様に会う資格はない旦那様に会えるのは秀でたものだけですと女は冷たく言い放つた。

ヘルゼンは聰さに秀でていますがあなたは何にも秀でていない帰りなさいと女に言われ、ヘルゼンが聰いならばわたしは美しいわ、あなたも美しい子と呼ぶ様に、旦那様も美しさを気に入るわ、と言つたグレエテルンの言葉に女は美しさが一体旦那様の何の役に立つと言つのです、と嘲笑つた。足の速きものは競わせればより速くなり旦那様の足となり働くだろう、料理の出来るものは日々旦那様の為に食事を作るだろう、賢き聰いものは競い学び合い旦那様の知恵となるだろう、しかし美しいものは旦那様の為に何か出来るだろうかいや出来はしないでしょう。

と言つ女にグレエテルンはわたしは旦那様の為に子を授かることが出来るわ、と言い返した。

女はますます高く笑い、旦那様は子を為す要はない旦那様は唯一無二の永遠な方、と言つた。

旦那様は性など持たず子孫など作らぬさあ立ち去れ愚かな子よそれとも自らが未だ美しいかこの鏡で見てみるか。

と言われグレエテルンは示された方向の鏡を見た。

風の音ともしれない悲鳴がグレエテルンの喉を付く。鏡に映るのは枯れ枝のような裸体をした傷だらけで目の落ち窪むの女である。グレエテルンは長く尾を引く叫びをあげながらも鏡から目を離せず、傍らで女が嘲りの笑い声を上げている女は言つ。

美しかつた子グレエテルンお前の場所はここにない立ち去れ。

しかしへグレエテルンは鏡から目を逸らせない。鏡の自分を触りわたしが、わたしがと咳き続けていた。

グレエテルンの傍らの女は愚かしい子、と呼び掛けるとグレエテルンは咆哮を上げながら女に飛び掛かつた。気狂いしたグレエテルンは赤々と燃える暖炉に女と共に飛び込む。声が上がるがすぐに静かになつた。

屋敷で書物を読んでいたヘルゼンは声を不審に思い部屋を出、声がしたと思われるところへ向かうが誰の姿も無く暖炉だけが静かに燃えていた。不思議に思つたがこの屋敷の主人に呼ばれ部屋に戻ろうとする。

しかしヘルゼンは呼び声に再び足をとめた。途端に暖炉が弾け氣のせいだと思い直す。背を向け一歩踏み出した途端、暖炉から伸びた手がヘルゼンを掴み引きずり込んだ。

ヘルゼンの姿は炎に消え、屋敷の主人は新しい飯炊き女が一人要るようだ、と呟いた。

二つの敵対する王族の中に密通し不義の子をもうけた者たちがいた。不義の親たちは政争によつて殺され、一人の子はいざこにいるか行方を知る者はいない。

波打ち際で砂金粒を拾い集める少年の姿を見たというものがいるがそれも定かではなかつた。

ヘルゼンとグレーテルン（後書き）

HP掲載、加筆修正。

ちいのかぎとたかひまー

ちこはかぎつーじです。

お父さんもお母さんもお仕事をしているわけではありませんが、ちい用のかぎをもっています。ひもを通して首から下げる、体育のとき以外は外しません。

ちいの友達でかぎつーじはなんにんかいりますが、ちいみたいな立派なかぎをもつてこるにはいません。

はるくんのかぎはさりげなくして、平らです。りかちゃんはマンションに入る前にボタンをぴぴって押すと、かぎがなくとも開きます。

やつくんとしーちゃんとかえでりちゃんはかぎを持つてません。

みんな、ちいのかぎをいいな、って言います。かつこいいな、いいなって言います。

だつて、ちいのかぎは大きくて重くて、かぎあなに入れるところがちゅんちゅん、とかたつぽだけに耳が出てるみたいな形をしてるんですね。

はるくんが言いました。

「それはたからばーのかぎだ！」

はるくんはゲームが好きで、ゲームの中にそんなかぎが出ていたのを思い出したのです。

けれどもちいは人さし指をくちびるに当たって、

「ふふふ。ないしょないしょ

と笑うだけでなんのかぎかは教えません。

やつくんもしーちゃんもかえでちゃんも、りかりちゃんもなんのかさか知りたいな、と思つていたんですけどね。

でもね、それはほんとうにたからばいのかぎだつたんですね。それがわかつたのは、ちいがいなくなつてからのことでした。

あの日、はるくんはお母さんにくつこ服を着なれこ、とこわれてびつづつしました。お母さんはあかるこいろがだこわせど、くつこ服はお父さんが着るだけでもいやなんです。

そんなお母さんがしんけんな声でくつこ服を着なれこ、とはるくんにいいました。はるくんはお母さんのこつとおつくつこ服を着て、お母さんにつれられてちこの家に行きました。

ちこの家にはやつくんもしーちゃんもかえでちゃんもりがちやんもいました。みんなくろい服を着ています。ちこの『写真』がくろいわくの中に飾られてこます。ちこはこーつと歯をくこしづつて、すこしひんせけでした。

ちこのお母さんじやない、やれしそうなお母さんがあるくんたちに「ありがとうね」と頭をあげました。ちこのお父さんじやない、からだの大きなおじさんびが「今日だけは静かにしてくれ」とやどこむかつてわざびました。それにたくさんの知らないひととたくさんのかめらがこまました。

はるくんはやつくとやしーちゃんたちとかえでちゃんのくつこに行ひびきました。かえでちゃんのお父さんびがちこについていひこを聞いてきました。

ちこのお父さんじやんはひとだつたが、お母さんとは仲がよかつたか。はるくんはひいたえられたえました。

ちこのからだにはあわがあつたりました。ちこはたまにおつり

帰りたくないところにいたる。おこはいつも笑顔だったこと。

たくさんの話のあと、ちこが遠いところへ行ってしまったとおしゃられました。

その日、りかちゃんは朝起きて、こつものとおり新聞をとつにときました。ちいがいなくなつても朝は変わらずやつてきます。りかちゃんはそれをかなしいな、と思いましたがりかちゃんにせざりしうもできなことです。

マンションの入り口の郵便受けの新聞をひっぱると、かつん、と何かが落ちるおどがしました。りかちゃんはあしもとをみました。すると、かぎがひとつ落ちていたのです。

大きくて重くて、かぎあなに入れるところがちゃんと、とがたつぽだけに耳が出てるみたいな形をしているかぎでした。りかちゃんはあつといいました。間違いありません。これはちいのかぎです。りかちゃんは周りを見渡しましたが、だれもいません。マンションにはマンションにするでいるひとと、新聞やさんと郵便やさんしかいません。ちいのかぎはどうやって来たのでしょうか。遠くへいってしまったちいがきたのかしら?

けれどもりかちゃんのところだけにちこが来たのではなかつたのです。やつくんとしーちゃんのところにちこはたからのちずを置いて行つたのです。

たからのちずはやつくんとしーちゃんの机のなかにありました。ノートをやぶつた紙に「たからのちず」とちこの字で書いてあります。やつくんのちずにはたくさんてんてんがうつてあり、しーちゃんのちずには短い線や長い線が引いてあります。

これはなんだらつへ、そしてちこはどうやってこれをいたのかしら?

みんなで考えてこりがえでちやんが言いました。

「「れせじまいをかわなるのー。」

その通り、たからのちずをかわると観覚のある場所のちずになつたのです。

「みんなでいってみようー。」

はるくんのよびかけでみんなはたからのちずの場所に行つてみるとこにしました。

たからのちずの場所には、これはたからのちずの場所なのでくわしいことはいえないのですが、ちつちやな小屋がありました。ちいのたからのちずはその小屋をわしていました。

ちつちやんとしーちやんとかえでちやんとせぬへことつかちやんせ手をつないで小屋のなかに入りました。

ちつちんが持つてきた懐中電灯をつけます。小屋なかは散らかっていて、ところどころ壁が壊れてそとが見えます。天井も壁も壊れてないといふ、そこにはじまいのブランケットが置いてありました。

「これかな
「これかな」

ブランケットは半分にたたまれていましたが、したになにかがあるよつで少しあがつています。ここにたからがあるのかしらーとつてもどきどきです。

みんなはブランケットの端をもつて、こつせーのー、でひつぱりました。かえでちやんの腕の中にすっぽり収まるほど、ちこちな木のこがブランケットの下に隠れていきました。

「まるでオルゴールみたい、あ、」*ヒカル*があなたがある

「」を調べていたかえでちやんがかぎあなたを指差しました。りかち
やんがかぎをそろそろとかぎあなたにいれてみます。

「ぴつたり！」

りかちやんがかぎを回すと、かきく、とおこせな音がしました。

「あけてみる？」

「あける？」

「あけてみよ」*ヒカル*。

そしてやつべつせんを開けました。

（……あつこ）

はこから透明なひかりがひとつ、とびだしてきました。ひかりがは
るくらの体を突き抜け、叫びました。

（いたこ）

ひかりがりかちやんを突き抜け、泣きました。

（れむこ）

ひかりがやつくんを突き抜け、怒りました。

(おなかがすいた)

ひかりがしゃーちゃんを突き抜け、歯をました。

(ビハシ)

ひかりがかえでしゃんを突き抜け、尋ねました。

ちーの声でした。

ひかりはぴゅんぴゅん飛び回り、その度にたくわんの声がみんなを突き抜けます。

あつによさむこよーはんがほしによいたいよたたかないでおつかへいれてなかなかいでやめてつわあんないこにするからなかなかだからだからだからだから。

みんなはつないでいた手をぱくぱくとぱくぱくしました。爪の先が白くなるくらいです。

ひかりがぐるぐる回り、みんなはよつぱりたお父わんに突き飛ばされたことやお母わんにパーティに置いていかれたことやずーっとずーっとお腹を空かせて泣いていたときへとくとに疲れたお母さんとお父わんに大きな声で怒られたことを思つ出します。

けれどもそれよりもつらへてこわくてかなしくビハシつもないちーの声がみんなの頭に響くのでした。

あつによさむこよーはんがほしによいたいよたたかないでおつかへいれてなかなかいでやめてつわあんないこするからなかなかだからだからだからだから。

やつくんもしーちゃんもかえでちやんも、せんくんもつかちやんも
だれひとり何も言はず泣きもせずくちびるをくいしばって、ついに
お葬式の写真のよつこーとくこしばって立ってきました。

じれぐらこやうじいたのじょひ。思に立とひこの瓶に押し潰され
そうになつたとき、透明なひかりがぼん、とはじけました。
暖かい風がふわふと広がり、みんなの頬をなでました。ふとくこ
しばつていた力が緩んだと、みんなの中にはうべが響きました。

(でもね、ひこせおひつねくわおかあさんか、だいすき)

ぱたん、とはじが閉まつたとたん、みんなせつせつ泣き立つま
した。

うわああん、うわああん、と声を上げてこます。
かなしいのでもこわいのでもつらのでもあります。

みんなは突き飛ばしたお父さんが慌てて抱き締めてくれたことや走
つて戻ってきたお母さんが抱き締めてくれたことやお父さんとお母
さんのおいだすやすやねむつたことを思い出してこました。ある
と胸のおくからりあつたかくなつて、次から次へと涙がじぼれるので
す。

みんなは手をつないだまま、あつたかい涙が湧き続けるまま、ずつ
とずつと泣き続けました。

やつくんもしーちゃんもかえでちやんもせんくんもつかちやんも泣
いて泣き続けていると、お父さんとお母さんが探しに来ました。お
父さんもお母さんもびっくりして「一体どうしたの?」と尋ねます。

「ちこ、せ」

「おとうさんもおかあ、たこむ、」

「だいすきだった!」

みんなはやただけ言ひて、お父さんとお母さん抱き合ひました。
みんなのうしろにふたの閉まつたは「」がひとつ。

それからどうしたかって?

みんなはやひるん、おひるに帰つました。せひは「ランケット」へ
るんで小屋に置いておきました。あとでまた来よう、そう約束しま
したがその小屋はすぐに取り壊されてしまつたので約束はなくなつ
てしまつました。

せひはやくこつたのでしょひ。一緒に壊されてしまつたのかしら?

ちこのかぎをりかちやんはなくしてしまつた。やつくんとし
ちやんもたからのちずをなくしてしまつました。大切にしまつてお
いたの「」じつでしょひ。せひくこつたのかしら?

それでも、やつくんもしーひやんもかえでちやんも、はるくんもり
かちやんもちこの「」じばを忘れません。あつたかいあのかんじを忘
れません。いつもふとしたり、ちこの声を思い出しています。

ちこはいつも笑っています。

(でもね、ちこはおとうさんもおかあさんも、だいすき)

(ふふふ、なこしょなこしょ)

(だからたかひがいむつまつむくべの)

「こののかぎとたかひば」（後書き）

「パンダリの箱」より

懇意を許容する意図はありません。

アリス、1（不思議の国）

まあ、主人公の名前はなんでもいいんです。

確かに外見は可愛らしい女の子でしたが、少年ではないことをだれにも証明出来ないです。

生まれつき色素が薄いのでしょう、金色の髪に碧の眼をしています。怒るとすぐ赤くなる白い肌。唇も白いので乳母がいつもピンク色のリップバームを塗っていました。

水色のエプロンドレスにペチコート、白黒縞の膝丈靴下にエナメルローファーを履いています。

もちろん頭には赤いカチューシャ。

ねえあなた、お名前は？

「アリス。

でもママはベスと呼ぶしパパはリジーと呼ぶわ。ダニエルビジヨーはエリーと叫うし、なんだつていいのよ。だから「今は」アリス。

My name is Alice, now!」

ですって！

ですから、主人公の名前はアリスにしておきます。
今のところは、ね。

さてお話はここれから。

アリスがうたた寝をしていると、白ウサギが駆けてきました。

白ウサギは白い毛並みに赤いお団め、黒いチョッキに丸めがね、手には懐中時計がひとつ。

「大変だ！遅れちまう！」

そんなことを言いながら一足歩行で走つて行く。
アリスはびっくりしてまんまるになつた目を、きらきらさせながら大きな声で問い合わせます。

「白ウサギさん！ そんなに慌ててどこへ行くの？」

白ウサギは聞き耳持たず、
あんなに長い耳があるというのにね、
忙しそうに駆けて行きます。

アリスはもちろん、白ウサギを追いかけます。
だってアリスはウサギを追うものでしょ？

「物語の主人公みたいね！」

アリスは気付いてないみたいですが、みたい、じゃなくて物語の主人公なんですけど。

とにかく、白ウサギを追いかけたアリスはウサギ穴に飛び込みます。アリスが飛び込んだウサギ穴は、びっくりすることに井戸でした。

井戸！

アリスは頭からまつさかさま、底に向かつて落ちて行きます。

「こままで死んじゃつわ！」

真つ暗な井戸の先を見ながら、アリスは心の中で叫びました。

でもね、アリス。

ウサギ穴に落ちたアリスが辿り着く場所はひとつなのよ。天国？ そんなわけありません！

アリスが行く場所といえばひとつ。

落ちて行く感覚にアリスは気を失ってしまいました。目が覚めたらびっくりするわね。きっと。

アリスは不思議の国の入口に着いたのです。

アリス、2(わたしをたべ)

わたりて、あなたはこつまでお黙りなさ?

「ハハん… 叔母さま、シロアリはゴキブリの仲間なのよ…」

まあアリス! なんて奇妙な寝言なー

可愛いアリスならストロベリー・キャンディやホットチキンバー
を口にするべきだわ。

そう思いません?

「ハハん… あひ、」

アリスは田が覚めたみたい。

ぱちぱちとまばたきをして背伸びをしたアリスは、周りを見渡して
びっくりしました。

「なんでじちや混ぜー。」

アリスが驚くのも無理はありません。アリスがいたのは柱時計、古
びた箪笥、クローゼット、螺旋階段、姿見、プラットフォームなど
なんだか一貫性のないようなものが「じちや」「じちや並んで(実際には
乱雑に)いるホールだつたんですね。

窓の向こうには海が見えます。綺麗な月夜!

「ええと、何をするべきなの?」

まあ、アリス、忘れちやだめよ。

白ウサギを追いかけるんでしょ?」

「そりそり。
わかったわ。正しい出口を選べばいいのね！」

「そりよアリス。お話は読んだことがあるでしょ？」

「もちろん。確か、小さな扉よ。それも本当に小さな鍵が必要」

アリスが探すまでもなく、アリスの足元に小さな三本足のガラステーブルがありました。小さな小さな錆びた銅の鍵が載っています。あら、銅の鍵なのね。

「うーん、金の鍵だと思ってたけど」

アリスは鍵を取り上げて物語を思い出そうと腕組みしました。

「あー、もう。忘れちゃってるわ！」

アリスがお手上げ、とでもいって両手を上げました。すると、小さな小さな鍵はするつと手のひらを抜けて飛んでったのです。

「まあ！」

「ほちやん。飛んでった鍵は窓の外。
まあアリス、どうしましょ。」

小さな鍵は窓の外、窓のなかに落ちました。
アリスは慌てて窓に駆け寄つて、叫びます。

「泉さん、お願ひ、鍵を吐き出して！」

それは無理じやないかしら。

けれども泉がふいに波打つて、きりきりする女の人が現れました。

「あなたの落とした鍵はこの金の鍵、それともこの銀の鍵、それともこの錆びた銅の鍵？」

まあアリス。これはチャンスね。

「ええと…正しいのは…錆びた銅の鍵よ！」

「正直な人。あなたに金銀銅の鍵すべてをあげましょ！」

わあ素敵。

「ありがとう！」

「ではさよなら」

ざぶん、と泉に女的人は消えました。
はねた水でアリスはびしょ濡れです。

「…まあ、鍵が手に入ったのだし、よしとするわ

心が広いわね。アリスは金の鍵を手に入れました。あとは扉を見つけるだけね。

アリスはすぐに扉を見つけました。小さな扉はカーテめよ。

「クッキー… eat meを食べると小さくなつて扉をくぐれるに違ひないわ。

でも、クッキーとクッキーちゃん、どちらを食べればいいの？」

まあアリス、そんなことで悩むなんて！

「だつて大きくなるかもしれないわ」

それはそつねアリス。でも早くしないと白ウサギに追いつけないのよ。

「待つて…クッキーには、EAT ME、つて書かれていて、クッキーちゃんは、EAT ME、を持つていろ…
ああ、食べるのそぞらのクッキーかしら…」

迷つたアリスはそつとん寝つて、よし、と覚悟を決めました。

ぱくふー！

「やつたわ！」

扉をくぐる「ど」が出来たのです。

どちらのクッキーを食べたかですつて？

それはクッキーのためにも内緒にしておきましょ。ね。

まあアリス、白ウサギを追いかけなきや。

「でも、白ウサギを探す前に…くしゅんつ、体を乾かしたい…くしゅんつ」

びしょ濡れアリスは震えながらくしゃみをしました。

「くしゅんつ」

そうね、濡れたままじゃ風邪をひこちゃうわ。でも、ビーツで体を乾かしたらしいのかしら。

今はほつといても暑い夏じゃなし、火をおこしても薪を集めなきゃ。

「乾燥機能付きランドリーがあつたりはしないわよね…」

それは望み薄ね。

とつあえず、アリスは少しでも体を暖めようと走つてみるとしました。

「少しでも白ウサギに追いつくかもしれないわ」

アリスが走つていると、遠くに何やら矢印が見えました。なにかしら。

近づくとそれは案内板のようです。こんなことが書かれていました。

‘なみだ池はあちら、

‘なみだ池? 池はもういいわ。だつて充分に濡れているものー」

アリスはぶんつと顔を背けて矢印と逆方向に走ります。

「あら、こなみだ池があるなら、いかがなせ何があるのかしら？」

「アリスは、まわりに回けて走ってしまったので、なみだ池でドロソーレースをしているデータードーやねずみたちには会えなかつたのです。残念ね。」

さて、アリスが走つていぐ方向には何があるのかしら？
到着するまでにしばらくかかりそつだから、その間にお茶でもいかが？

アリス、3（芋虫とトカゲ）

はつとベスが気が付くと、目の前に空が広がっていました。

「…わあんつのは、×××トカゲ！」

ベスは髪に絡まつた枝葉をとりながら、とても教えてあげられない悪態をつきました。ベスつたら！

「に、しても、随分と高いところに飛ばされたわ」

ベスがいたのはとても広い鳥の巣でした。ずいぶんと大きな鳥がいるものね、とお思いでしょ？

いいえ、お茶をすすめている間に「こんな」とがあつたんですね。

アリスは走つても走つてもなかなか次の場所にたどり着かないで、そういうえば自分が小さくなつたことを思い出しました。
扉をくぐつたのだし大きくなるべきだわ、そう思つたアリスは森の中で芋虫を探すことにしたのです。

「芋虫がきのこの場所を教えてくれるのよ。大きくなれるきのこをね」

物語を覚えていたアリスは、芋虫のいそうな場所、つまり煙がのぼつているところを目指します。まあ実は物語を覚えていたというより、煙を見て芋虫の水たばこを思い出したのです。

アリスはすぐに煙の元に着きました。

ですが、なんてこと。アリスが着くのが一歩遅かつたのでしょうか、

「ああ、 苺虫ちゃん、 いえ、 わなぎちゃんー あなたに訊きたいことがあります」

「ああ、 苺虫ちゃん、 いえ、 わなぎちゃんー あなたに訊きたいことがあります」

アリスが呼びかけると、 わなぎは寝たげに答えました。

「Who are you?」

「H... m ...」

そこまで言つてアリスは口ごもりました。
自分はアリスかしら? 小さくなつたアリスはアリスだつたかしら?
今の自分に相応しい名前にしなきや。

「... My name is Beth ·Bethよ」

「ベスとやらは何の用だい?」

ふわああ、 と欠伸が聞こえました。 ベスはわなぎが寝てしまわないうちに急いで尋ねます。

「大きくなるまでのことはど?」

「... 右に五個、 左に二個」

わなぎの近くに「きのこ」が群生してました。 ベスはきのこの群れを見つけて、

「左から五個目、 右から二個目ね。 ありがとう」

ぱたぱた走ると、自分と同じくらいの大きさの「」を数え、

「これねー。」

手を伸ばして千切ると躊躇もせずぱくさり、と食べました。

あるといひじょい。

アリス、いえ（間違えてしまうわ、全くー。）、ベスの体はみんなうちに小さくなってしまったのです。

「ああ、何でー」とー。」

ベスは叫んだけれども、小さすぎて聞こえません。だつて今のベスつたら蟻ほどの大さなんすもの！ベスはどこまで小さくなつてしまふかと心配しましたけど、なんとか山蟻ほどの大きさでとまりました。

「…その「」を間違えて食べてしまったんだわ」

ベスは遙か高こと「」にあるきのことよつやく見えるせなきの姿に眩きました。

「でも、胴がなくなつちゃつたり、首が伸びるよつましだわ」

ベスは不思議の国のアリスの、あの挿し絵が嫌いでした。

「でも、どうやって戻ればいいのかしら？」

大きくなるきのこは反対側です。
たどり着けたとしても傘に手が届かないわ。

「だれか、 そだれかが通りがかればいいのに」

すると些か都合主義だけれど、くしゃみが聞こえてきました。枯れ草を踏む足音もします。

「だれかしら… アリクイじゃないといいわ」

ベスの前に現れたのはトカゲでした。顔中すすぐだけで、時折大きくなくしゃみをしています。

「煙突掃除人のトカゲだわ！」

ベスは自分がここにいることを気づかせようと大きく両手を振りましたが、トカゲは全く気づきません。

「おーい、 おーいつたら！」

必死のベスはトカゲが田の前を通りすぎるので、慌てて飛びつきました。なんとかトカゲの足に飛びついたベスは振り落とされないようにしがみつきます。

「ねえ、 気づいてくれてもいいんじゃないからトカゲさん！」

ベスは叫びましたが、声が小さいのとトカゲがぶつぶつ何か言つているのとで聞こえていないみたい。

「…全く、あの白ウサギめ、毎度毎度煙突を詰まらせんんだから…」

そもそも冬モになれば暖炉なんかいらぬじゃないか…」

ぶつぶつことなことを言ひてたんですけど、トカゲの言葉なんか全く聞いていないベスは（話を聞かないのはベスもベスね）トカゲの体をよじ登るのに必死でした。

「耳元で叫べば聞こえるわ」

そつ思つて体のざらざらしたつるこに手足を引っ掛けで登ります。でもベス、トカゲの耳つてどこのにあるの？

「とりあえず、頭にたどり着けばあるはずよ。たいてこいつ場合、頭のてつぺんか鼻筋よ」

やつとのことで頭にたどり着いたベスは、トカゲに向かつて叫びました。

「ヘルプーーー助けてーーー！」

トカゲは鼻のあたりがむずむずしていました。煙突の中で灰が鼻に入つたのでしょうか？ それでさつきから大きなくしゃみがでるのです。

「それもこれもあの白ウサギの…」

つて、とにかくしゃみが一つ。

鼻先にいたベスまで吹き飛ばしてしまったんです。吹き飛ばされたベスはくるくる回りながら、さらに風に煽られて上昇気流にのります。

「 もうダメー 」

ベスは氣を失いました。

それで目が覚めたら、鳥の巣の中だつたんです。
と、いうことで。ベスは高い木の上の鳥の巣の中、背丈は蟻ほど。
かじりこみしちゃ?

「 ……のままで鳥に餌として食べられてしまうわ。蛇と間違われるよりいにけど…うん、食べられるのはイヤだわ食べるなら考
るけど、 」

ベスはうんうん唸つて、（時折トカゲに対する罵倒が入つたんです
けど）では言えませんー）覚悟を決めました。

「えいー！」

まあー！ベスはスカートを翻し、鳥の巣から飛び降りたんです。
ベスは風に乗り、飛んでいくよに落ちていきました。

（なんだかこの国に来てから落ちっぱなしだわ）

ベスがそつ思つた途端、ばしゃん、と大きな音を立てて落ちました。

（そして濡れっぱなしー）

ぬるい水が体に纏わりつきます。ベスはばたばた手足を動かして、
なんとか浮かぼうとしました。

けれども、どっちが水面かしら？どこくむかって泳げばいいの？
水は濁つていてまるでミルクティーの中にいるみたいです。上下左
右もわからぬベスは息が苦しくて苦しくて、水を飲み込んでしま

いました。

「ううん！

するどどりでしょ。カップのひっくり返る音とソーサーがぶつか
る音、いくつかの食器がひっくり返つたり割れる音がして：

ベスはテーブルの上に座つていました。

アリス、4（気狂いお茶会）

辺りに薰るのはミルクの匂いです。

「…はっくしゅんっ」

ベスはびしょ濡れの体をぶるつと震わせました。泉のときのように水じやないだけましかも、と思いましたけど、水色のエプロンドレスが濁つた色になつているのと茶色と黒の縞縞になつた靴下を見て、

「全くまじやないわ！」

と悲鳴をあげました。ベスから滴るミルクティーがテーブルの白いクロスに染みていきます。回りにはティーカップとソーサー、ミルクポットやスプーンが散乱していました。

唯一無事なのは砂糖壺くらいかしい。

「ミルクティーのカップ中に落ちたのね。そしてミルクティーを飲んだら大きくなつたんだわ！」

ベスはドレスの裾を絞りながらぐるつと見渡します。ベスが乗つているまあるいテーブルにはイスが六脚、でも誰も座つてません。

「…誰もいなかつたのはラッキーと見るべきね」

こんな姿を六人の前に曝したくはないわ、とベスは咳きます。ベスのドレスから絞られたミルクティーはカップにちょうど一杯分、ありました。

テーブルの周りは木、木、木…その合間に扉が三つ。

なにかしら?

「アリスでティーカップといったら決まってるわ。気狂いお茶会よ、
m a d t e a p a r t y! ならあれば帽子屋ね!」

ベスはテーブルから飛び降りると扉に向かつて駆け出しました。

扉にはシルクハットをかたどつたノッカーが付いています。ベスはノッカーを力いっぱい（それはとても重かつたんです！）叩きました。

「…なんだい騒々しい、」

「初めまして帽子屋さん!」

ベスはドレスの裾を揃んでお辞儀をしようとして裾から滴るミルクティーに気づき、慌てて絞りました。

「ミルクティーの滴るお客人、君はどなたかね。What you
r name?」

「My name is...」

そこでベスは思いました。小さなベスはこんなに大きくないし、ミルクティーが滴つてもいいないわ。なら今のベスはベスじゃないんじやないかしら？

「...Elsie, ハルシーよ」

「初めましてエルシー、私は知つての通り帽子屋だ。初めてなのに

なぜ君が知っているのかは分からぬがね。

エルシー、なぜそんなにミルクティーを滴らせているんだい？私の知る限りでは、ミルクティーの雨が降ったとは聞いていないなあ

エルシーはぐつと言葉に詰まりました。トカゲのくしゃみに吹き飛ばされた、なんて言いたくなかったのです。それに、トカゲに会つまでも何だかとても長くて。

「…どこから話せばいいのかが分からぬわ。どこまで話せばいいのかも、」

「話しなどー！」

帽子屋は両手を高く上げてエルシーを見ました。

「最初から始めて最後に来たら止めればいいのさー。」

「…そ、それはそうね」

エルシーはなるほどと頷きました。両手を上げた帽子屋は有無を言わさず、というか反論を許さないようになります。

何だか威嚇されているみたいだわ、とエルシーは思いましたが賢明なことに口には出わずにいました。

「ミルクティーに濡れているのはティーカップに落ちたからよ。ティーカップに落ちたのは、鳥の巣から飛び降りたからで、鳥の巣には風に飛ばされたの。

さなぎさんに教えられたきのこじや大きくなれなくて、逆に縮んでしまったから。

縮んだから扉を通れたんだけど、なかなか追いつけなくて、クッキ

「ちやんはおいしかったけど。

そつよ白ウサギを追いかけで井戸を落ちたのよ。」

「うふ、エルシー。白ウサギを追いかけなきや。

「ねえ帽子屋さん、白ウサギを知りません? チョッキを着て懐中時計を持っていますの、」

「時計? 時計? だって! ? 時計のことならこの私に知らぬことはない。

「なぜなら私は帽子屋だからな! 」

「帽子屋だからですって? 帽子屋がどうして時計に詳しいの? 帽子のことならいざ知らず! 」

「帽子屋だからに決まっているだろ? が、エルシー! 」

「エルシー、君、帽子屋に何が売っているとおもつのだね? 」

「帽子に決まっているじゃない

何て妙なことを訊くのかしら、とエルシーは思いました。けれど帽子屋は扉を開け放ち、部屋の中をエルシーに見るよつに促したんです。

「見たまえ、君、帽子屋は時計を売るものなのぞ、エルシー! 」

「まあ? 」

エルシーは言葉を失いました。それも当然です。帽子屋の部屋の中を埋め尽くすのは壁掛け時計、置き時計、柱時計、腕時計、時計、時計… それらがみんな時を刻んでいるのですから…

「まるで時計屋敷だわ、」

エルシーは驚いてぽつりと呟きました。時計屋敷なんて見たことがないけれど、あるとしたらきっとこんなだらうと思つたんですね。けれど、

「時計屋敷だと!? 君、それはどこにあるのだ。私が知らない時計はあるはずがない！」

エルシーの言葉に反応した帽子屋はエルシーの両肩に手を置き、揺さぶります。エルシーは脳みそが十分シェイクされてからようやく帽子屋を引き剥がしました。

「…こんなに揺さぶられた、たら、言えることと言えない、わ…」

「…」

エルシーはくらぐらする頭を抑えながらしゃがみ込みました。あんまり揺さぶられたのでミルクティーに濡れた服も乾いたほどです。

(喜ばしこじただけで喜べないわ…)

エルシーは揺さぶられて、気持ちが悪くなりました。そのまま揺さぶられていたら、気を失っていたことでしょう。

エルシーが意識を手放しかけたとき、帽子屋の時計という時計が一

齊に鳴り出せなかつたら！

ジリリリリリリ
ペペペペペペペ
ゴーンゴーン
パツポーパツポー

何でいつ音量！時計それぞれが割れんばかりで時刻を告げているんです。

「…………」

帽子屋が何かを言ってエルシーを離しましたが、エルシーには聞こえてないみたい。当然ね！

ああ、それにしてもうるさいわ！

帽子屋、早くその音を停めて頂戴！

帽子屋は懐から懐中時計を出し、時刻を確認しています。どうしてわざわざ懐中時計を見るかですつて？

それは時計たちがそれぞれ異なる時刻を指しているからです。どれが本当なのかわかりやしないわ。

と、音がぴたつとやみました。

エルシー、大丈夫？

（ま、まだ耳の中鳴つてる感じ）

へたり込んだエルシーに、帽子屋が言います。

「何をしているんだ、お茶の時間じゃないか！」

帽子屋はエルシーを引っ張り立たせると、強い力で店の外に連れ出しました。

エルシーが歩かなくてもいいくらい、すごい力です。

「う、腕がもづちやうわ！」

（それにお茶なんてー！ミルクティーに落ちたばかりだから充分つ。）

「なんのことだ！ティーテーブルがぐちゃぐちゃだ！」

突然帽子屋は止まつたものですから、エルシーはポイッと投げ出されちゃいました。まあ、丁度椅子の上だつたからいいわね。

「支度をし直さねばならないではないか。エルシー、君、ヤマネの店に行つて来てくれ！」

帽子屋はそう言つてエルシーに唯一無事だつた砂糖壺を渡しました。残つた食器はテーブルクロスでくるんで、投げました。いくつか悲惨な音がしたけど、聞かなかつたことにしましょうか。

「ヤマネ？ヤマネの店で何をするの？」

「エルシー、君は何も知らないなー。ヤマネの店はティーカップ専門店だ。いれたての紅茶を六揃い、くれぐれも砂糖壺を忘れるな！」帽子屋はエルシーに3つの扉のうちの1つを指差しました。

「急いでくれ、お茶の時間はもう過ぎているんだ！」

エルシーは砂糖壺を抱えて走りました。ティーテーブルをぐりゅぐりゅにしたのは自分だから少しほんの手伝いしなくちゃ、と思つたんです。帽子屋が怖かつたつていうのもありましたけど。

扉にはティーカップをかたどつたノックマークが付いていました。エルシーはノックをしようとしたが、あら、取つ手がないわ。

「カップの口がぐり貫かれてる…もしかして、」

と、エルシーは砂糖壺から角砂糖をひとつ、ティーカップにほ取りました。ちりんちりん。

小さい鈴が鳴つて、扉が薄く開きました。

「誰だい？」

「ヤマネさん、いたての紅茶を六揃い、くださいな。帽子屋さんの言付けなの」

姿を見せたのはネズミのよう、そんな感じです。

「砂糖壺をお出し」ヤマネはエルシーから砂糖壺を受け取ると、中をすっかり食べてしまつました。角砂糖をそんなに食べて、気持ち悪くないのかしら？

「お茶は間違いなく持つてこくよ。あたしもお茶会に呼ばれているからね。帽子屋に今日は公爵夫妻がおいでになるから、ジャムの用意は出来ていいか、確かめとておくれ」

「ええ、でもヤマネさん、お茶会はもう始まつている時間だつて帽子

帽子屋さんが言つてゐたのよ。急いで持つていかなきや…」「

「あやつが時間を間違えるのはこつものじとや。たくさんの時計のうちひとつも正しこのはありやしない、」

ああ、お茶をいれなきやね、とヤマネは顔を引っ込みました。

エルシーは帽子屋の元へ戻ります。

「帽子屋さん、公爵夫妻がいらっしゃるのよ。つて、まあ…」

エルシーはテーブルに戻つてびっくり。テーブルに真っ白なシーツがかかるつていいとして、並んでいるのは時計、時計、時計…椅子にも近くの木々にも時計がかかつてゐるのです！

「帽子屋さん、お茶会のはずでしょ？ これでは時計の会だわ」

「そう、公爵夫妻が来るのだったな。エルシー、君、急いで時計屋に行つてきてくれ」

「時計屋ですつて？ これ以上の時計はいらないわ、」

エルシーは眉をしかめました。

「君、エルシー、何を言つてゐるのだ。時計屋に時計があるわけがなからう。時計は帽子屋が売るものだ」

「じゃあ何があるつてこつの？…」

「ジャムを売るのやー。」

当然のように言い切られ、エルシーは思いました。

（…帽子屋が時計を売り、時計屋がジャムを売る、有り得ないことが
じゃないわね。いいえ、現に有り得ているんだから…）

エルシーは帽子屋の機嫌を損ねないよう、時計屋の元へ走りました。

（でも、大好きな帽子屋が嫌いになりそうだわ）

時計屋は三つの扉の一つ、店主は三月ウサギです。

「三月ウサギさん、ジャムをくださいなー。」

エルシーは扉を叩いて（だってドアノックがついていなかつたん
です）大声で呼びました。
けれども返事はありません。

「三月ウサギさん、時計屋さんーいるのかいないのか返事をしてく
ださいー。」

エルシーは本当に何度も叫びましたけど、返事はありません。
留守みたいよ？

「そうね、」

エルシーは三月ウサギに会えなかつたことをちょっと残念に思い
ながら、帽子屋のところへ戻りました。

けどね。

「 こ る な ら い る と 言 つ て 頂 戴 ！」

帽子屋のティー・テーブルには既に五人、座っていたんです。嬉しそうに時計をカップに浮かべている帽子屋、溢れんばかりの砂糖を入れ続けるヤマネ、それに沢山のジャムの瓶をポケットに入れているのが三月ウサギでしょう。

アリス、5（公爵夫妻）

あと、落ち着いた感じの青年と、エルシーより幼い少女がいます。
親子かしら？

「遅いわ。このあたしを待たせるなんて」

女の子が言いました。

「お待たせしたのは悪いけど、こちairoにも理由があるのよ。帽子屋さんに言われたとおり時計屋さんに行つたのだけど、三月ウサギさんは留守だったのだもの、」

「三月ウサギはあなたより先にここにいたわよ。それにこんな氣狂い帽子屋の言つことを真に受けたなんて！」

ねえ、と少女は隣の青年に同意を求めました。

「やつだね、マイ・ディア」

青年は微笑み、頷きました。

「しかもあなた、その格好はなんでしょう！ よつぼぢミルクティーがお好きなのね。頭の先から足の先までミルクティー色だなんて！」

言われてエルシーは自分をじっくり見ました。エプロンドレスはもとより、靴下もリボンもカチューシャも、髪の毛すらミルクティーに染まっています。

無事なのは黒いエナメル靴と碧の瞳くらい。

「…」、これにも色々事情があるのよ」

「ミルクティーに事情がおあり？ ねえ、」

「そうだね、マイ・ディア」

「ミルクティーに染まるとあなたたちには関係ないわ！ 何故知りもしない人にはされなきやいけないの？」

「知りもしないですって？ あたしたちを知らないそうよ、閣下、これは許されざることだわ」

「そうだね、マイ・ディア」

エルシーはかちん、と来ました。（表現が古いかしら？ まあいいわ）
だってこんな小さな女の子に責められるなんて！

「いいですか、レディ？」

レディと呼びかけたのもエルシーにしては上出来です。エルシーとしてはガールと呼びたいところですから。勿論、ベイビーと呼んでしまいたい気持ちも大きかつたんですけど、そこはエルシーも思い止まります。

ですが。

「レディ？ レディですって？ お聞き及びでしようが閣下！ このわたくしのことをレディと呼びましたわ！」

「マイ・ディア、確かに聞いたよ。失敬な、」

少女はエルシーがびっくりするくらいの剣幕で怒り出しました。

「ど、どうしたのよ？」

「どうしたもこうしたもあるものか、君、エルシー……君はこの方をレディと呼びなすつた！」

「そうさね、マダムをレディと呼びなさるのは確かに失敬だと思つよ」

「マダム？？」

帽子屋とヤマネに言われて、エルシーは思い当たりました。

「まさか、公爵夫人ですか！？」

「わたくしが公爵夫人でなくて、誰が公爵夫人だとおっしゃいますの？」

「そうだね、マイ・ディア。君以外に僕の伴侶には成り得ない」

（随分と年の離れた夫婦だわ。幼妻にも程がある…）

「…無礼をお許し下さいます？夫人。失礼なことに、その、公爵閣下と存じ上げず…公爵夫人とは知らなかつたものですから、」

エルシーはできるだけ、低姿勢を心がけて少女、いえ、公爵夫人を伺いました。

「まあ！やはりわたくしを存知ないとは…」この国でわたくしを知らなかつたと堂々と仰るなんて！

これは陛下の前に連れすべきだわ！ねえ、閣下？」

「そうだね、マイ・ディア」

ですけど、まあ、こんなことを早口で畳みかける公爵夫人に腕を引かれて、エルシーは走らざるを得なくなりました。公爵夫人の速いこと速いこと！

「紅茶も頂いてないわ！せつかくの憧れの気狂いお茶会だったのに！」

エルシーは腕を引かれるまま、半分宙に浮かびながら公爵夫人のあとについていきます。

あら、三月ウサギつたらまだ一言も話してないわ！今を逃すと出番がないけど、いいの？

……。

あら、寝ている。

しうがないわね、たくさんの登場人物がいるのだから、三月ウサギくらい飛ばしましよう。帽子屋はにたにたしながら時計入り紅茶を飲んでいるし、ヤマネは紅茶入り砂糖（としか言えないくらい砂糖たっぷりの紅茶だわ）を食べているし、私たちもエルシーを追わなくちゃ。

つて、公爵閣下、夫人と一緒にいませんの？

……。

反応がない。夫人以外とは話さない氣かしら。それとも私が若くな

いから… いいえ、あの夫人と比べたら皆年上だわ。

とりあえず、エルシーを追いましょう。随分遠くへ行ってしまったけれど、追いつけるかしら？

追いつけばこの物語が終わってしまうわ！

エルシー、エルシー？ 公爵夫人？

ああ、駄目、見失つてしまつたわ。ねえ誰かいませんか。どなたかエルシーと公爵夫人を見かけてません？

何処に行つたのかしら。うーん、同じような森で判断がつかない。夫人は陛下の元へ、と仰つてたけど、陛下つてどちらにいらっしゃるのかしら。

せめてチエシャ猫がいてくれたなら…。ついにこのときにチエシャ猫が出てきて案内してくれるのが定石でしょうね。

…しつ。…しつ。ねえ、聞こえました？ええ、声がしたわ。こっち…ほら、泣き声のような…。こっち、こっちの方向よ。この奥、そう、あの木の後ろ…

まあ、チエシャ猫だわ！
言つてみるものね！

でもあなた、本当にチエシャ猫なの？チエシャ猫つて耳まで裂けたくらい大きな口でにたにた笑つてる、生首だったわよね。女王陛下の不興を買って首をはねられた。ええ、首から下があるのはいいのよ。大変良いことだと思います。生首よりはね。生首は心臓によくないわ。

でも、このチエシャ猫つたら笑つていないんです。ずう一つと泣きつぱなし。

泣きつぱなしのチエシャ猫なんて！

「どうすればいいのかしら。」
「おひで見ておいて他の猫を探すべき
かしら？」

他の猫？あら、不思議の国に他の猫なんていたかしら…
鏡の国ならいたはずだけど。

やつぱり、このチエシャ猫しかないのね。…まだ泣いてる。なに
がそんなに悲しいとこうの！

…………

「無視？無視するのね？わかつたわ、わかりましたとも！あなたな
んかに頼りません。女王陛下は自力で探すわ。

でも一体どちらに行つたらいいの？

同じような木々の中、いるのはチエシャ猫だけです。辺りもすつか
り暗くなっています。

どうすればいいのか分からずにへたり込んでしまいました。
チエシャ猫はまだまだ泣き続けています。泣きたいのはこっちのほ
うだわ！

どれくらい経つたのでしょうか。ふと森を甲高い叫び声のよくな喇叭
が鳴り響きました。

チエシャ猫でさえびっくりして泣き止んでいます。あれはなに？
静かな森に足音がひとつ、ふたつ、と聞こえました。誰かいたわ、
よかつた！

…と思つ間もなく、こんな声が耳に入ったんです。

「喇叭だ！」
「処刑の喇叭だ！」

「首が跳ぶぞ！」

首、という言葉を聞いたとたんチエシャ猫が泣き出したのですから、その後の会話が聞き取れません。けれど、嫌な予感がしました。とりあえず、足音が向かうほうへ急ぎましょ！

向かった先は広場でした。生け垣がぐるりと真四角に囲み、各角に四つの切れ目があります。広場の中央にカウチがあり、カウチの真ん中に座っているのは……

まあ、アリス！

……ではなく、今は何だつたかしら……ベス、リズ、エルシー……随分長いこと見失つていたから分からなくなつてしまつたわ。
もう！

ええ、そうです。主人公の名前なんて何でもいいんです！

だからあればアリス！

アリスが不機嫌な様子で座っていました。正確には座らされていました。アリスの後ろには公爵夫人が立つていて、公爵夫人の後ろには公爵閣下が立っています。いつの間に。

公爵閣下は公爵夫人を抱きかかえ、その上からアリスの両肩を押さえつけているのです。

カウチの両脇にはフランソワを連れた兵士がアリスを睨んでいます。

一体どういう状況なの？

すると喇叭が高らかに鳴りました。広場に集まつた人々、動物のほうが多いんですけど、がざわめきます。

女王陛下のお出ましですって！

ようやくアリスらしくなつてきたわ。物語は佳境に入ります。
多分、ね。

アリス、6（女王陛下と裁判）

期待を裏切らず女王陛下方のご登場です。

女王陛下、方？

四つ角からお一方ずつ、先導する兵士と侍女を従えて女王陛下が見えました。

薔薇の花束を抱えた侍女が付き従つてるのは豊満な体をコルセットで明らかに絞り、やわらかな笑みを浮かべた女王陛下。赤のたつぱりとしたドレスは胸元を惜しげもなく見せています。なんて見事な赤の巻き毛なんでしょう！

一方、黒髪のゆるやかなウェーブヘアの女王陛下は首の詰まつた露出の少ないドレス姿、濃い緑の布地に花飾りをつけています。従う侍女は大きな水瓶を一人がかりで抱えて大変そう。

他方、金髪を結い上げた女王陛下は沢山の宝石を散りばめた薄いレモン色のご衣装で、頭飾りも首飾りもすべてが輝き目が痛いほどです。侍女が宝石箱のような小箱を掲げています。

そしてあの女王陛下の色の白いこと！濃紺のドレスはスレンダーな体にぴったり合っています。髪は結い上げているのかしつかりと布地で縛り、剣を左手に持っています。従う侍女も戦装です。

「あなたが、エルシー？」

赤の女王陛下がカウチに座りながら問いかかけました。

「さなぎにはベスと名乗ったそうですね」

縁の女王陛下がその隣。

「気狂いお茶会ではエルシーと名乗ったのでしょうか？」

金の女王陛下がカウチの反対側の端に座ります。

「さて、お前の名は一体何だうねえ」

青の女王陛下がアリスの隣に座りました。

（まるでハーレム！）

アリスは口には出さず感激しました。女王陛下を四人も待らせるなんて、なかなか出来ませんから。

「My name...」

そこでアリスは口もつます。黒たして、今アリスはアリスかしら？

エルシーではないみたい。だってミルクティーに染まつた服は女王陛下の前だからって取り替えさせられたもの。

ベスではないわ。小さくないもの。

エリザベスは思わず言つちやいました。

「法廷つて入つたことはないけど、…」これは絶対に違うでしょう！」

座つてゐるといつよりも既に首も固定され、押し付けられてゐる状

態。ヒリザベスからは見えませんが頭上では刃物がぎりつ、つてヒリザベスがいるのは斬首刑台、ギロチン台です。

「刑の執行が先、判決が後、ですわ」

赤の女王陛下の声がしました。

「斬首がお嫌なら茨の冠を被つての鞭打ち刑が直していく？」

「…そんな痛そうなのは遠慮しますー。」

「ならば水瓶に顔を沈めましょつか」

緑の女王陛下が言いました。

「…そんな苦しいのは無理よー。」

「だつたら、毒をあおる？」

金の女王陛下が言いました。

「そんな恐ろしことできないわー。」

「だつたら斬首しかなかろう。心配せずっともあつとこつ聞に終わる。おまえが判決を聞くまでもなくねえ、」

青の女王陛下が言いました。

「…ですから、何故首をはねられなければならぬのですかー？」

「それは刑の執行の後、白ウサギが主文で告げる。審議はその後だ」

「それじゃ理由すらわかりませんわ！」

「いつおりだわエリザベス。」

「理由などわからなくてよいのだよ。ここは不思議の国だから」

あ、と思つたときには青の女王陛下がギロチン台のロープを切り離し、刃は重力に従つて真下へ落ちました。

すとん。

ごろごろ。

エリザベスの首はこころと転がつて、一緒に切られた金髪をばらまきながら辺りを真つ赤に染めました。

ひょい、と拾い上げたのは白ウサギです。やつと会えたわね、エリザベス！

首の付け根からぼたぼた血が流れるものですから、白ウサギは着ているチョッキ」と転々と赤くなっています。

さあ白ウサギ、エリザベスが首をはねられた理由を教えてくれません？

「マアリー・アン、こんなところにいたのか」

白ウサギはそう言つてエリザベスの首をチョッキのポケットにしまおうとしましたが、大きくて入るわけがありません。そしてそれはエリザベスよ、マアリー・アンじゃないわ。

「閉廷、閉廷！ 被告人の刑は執行された！ 判決は斬首、告訴理由は

逃亡罪、被告人はメアリー・アン！」

白ウサギがそう叫ぶと喇叭が鳴り傍聴人と陪審員が退廷しました。四人の女王陛下と白ウサギだけが残ります。

「メアリー・アンは決まり通りクローケーの玉に！」

エリザベスの首はメアリー・アン、メアリー・アンはクローケーの玉になると決まっていたみたい。決まりならしようがないわね。

白ウサギの言葉に女王陛下はクローケーは久しぶりだ、と喜びます。

「ではすぐに準備をいたしますので」

と白ウサギがメアリー・アンを連れて去り、女王陛下も始末を兵士たちに任せてクローケーの用意に城に戻ります。法廷にはだれもいなくなりました。残ったのはメアリー・アンの首を持つていかれたエリザベスの体だけ。

物語はどうなるのかですって？

主人公がいなくなつた物語はそこでおしまい、それが決まりでしょう。

主人公の名前はなんでもいいですけど、主人公は生きていなくちゃ、白ウサギを追いかけられないでしょう？

ではこの物語はこれでおしまい。

白雪の人形姫、1（一人の姫）

妃は望んだ。

雪のように白い肌、
炭のように黒い髪、
海のように碧い眼、
血のように赤い唇を持つ娘が欲しいと。

望みは叶えられ、妃の元に女の双子が授けられた。

白雪の肌、
漆黒の髪、
緑柱石の瞳、
血の唇を持つ赤児と
象牙の肌、
栗毛の髪、
闇の瞳、
桜の唇を持つ赤児。

妃は自らが望んだ通りの娘を可愛がり、真綿で包むように育てた。

双子の姫はすくすくと育ち、年頃になる。後継王となる王太子は既に王の片腕として即位しており、姫たちはそれぞれ主要な家臣と隣国の皇帝の元へ嫁ぐことになる。

白雪の人形姫、2（桜の姫と狩人）

国王の妃は生まれながらに体の弱く、病でもないのに床に付いていることが多いつたといつ。

国王には何人かの寵愛する女がいたが、家柄の良さのため又後盾の強さのために第一妃として王の後宮にいた。

妃の懷妊を知った王は同時にそれが妃の命と引き換えであるとも告げられた。

それでも、と望んだのは妃である。

妃は自身の立場のために子を望んでいたが、既に王の他妃のもとに王子はおり、後継として申し分のない身分と器量であった。

國を乱すこと好まない妃は姫の誕生を望む。妃を慕つものたちは最後だと思われた妃の願いを叶えようとする。

腹の中にいる児が妃の望むように産まれるとは限らない。家臣たちは思考した挙句、妃の望む姫をあつらえた。

それ、は漆黒の髪、血の唇を持つ陶器で作られた赤児であった。

妃は娘を一人産んだが、姫は双子として妃の元へ抱かれた。

白雪の肌、漆黒の髪、緑柱石の瞳、血の唇を持つ赤児と、象牙の肌、栗毛の髪、闇の瞳、桜の唇を持つ赤児である。

妃は白雪の肌を持つ赤児を可愛がり、桜の唇を持つ赤児には興味を示さなかつた。

双子の姫はそれぞれ、白雪の姫に桜の姫と呼ばれた。

白雪の姫は成長に伴い何度もあつらえられ、桜の姫は順調に娘になつた。

白雪の姫の美しさは人にはみえないほどであったが、桜の姫は人並みであった。子を産んで後亡くなると思われた妃は、白雪の姫のために生き長らえた。体も強くなり、姫たちの年頃には他妃たちと同じように生活できるまでになつた。

だからこそ王も他妃も家臣たちも白雪の姫を知りながら、白雪の姫をあつらえ続けたのである。

双子の姫は育ち、年頃になつた。その頃隣国皇太子からの縁談があり、身分も家柄も人格も申し分のない桜の姫が輿入れることになった。同時に白雪の姫は主要な家臣の一人が貰い受けることになる。白雪の姫の結婚式が桜の姫の最後の演技となつた。

桜の姫はいつもの如く漆黒に髪を染め、白雪の面を被つた。婚礼の衣装を身に着けていると、白雪の姫の伴侶となる家臣、狩人と呼ばれるものが訪れ、本当にそれでよいのかと尋ねた。

白雪の姫となつた桜の姫は、貴方こそ本当にそれでよいの、と聞き返す。

二人は幼少の頃より慕い合つた仲だつた。

私は貴女さまのお側に仕えることは叶いません、ならば貴女さまのお力になれば、
と狩人は言つ。

わたくしは貴方と添い遂げることは叶いません、ならば形だけでも貴方に嫁ぎたい、

と桜の姫が言つ。

かくして、白雪の姫と狩人の結婚式は執り行われ、それは身内だけの簡素なものだったが妃は満面の笑みとともに幸せな二人を送り出した。

その数日後、桜の姫の輿入れがあった。隣国の皇帝より贈られた品々に身を包み、国境まで迎えに出た皇太子とともに皇帝の元へ上った。半年後、皇帝は退位し皇太子が新帝に起つた。

そのとき桜の姫は懷妊していたという。

白雪の人形姫、3（妃と鏡）

白雪の姫の結婚式の晩、一ひとほぎの宴で妃に貢ぎ物をしたものがある。

それは美しい装飾をした鏡だった。

しかしそれほど重くなく、片手で持つ柄が付いている。

妃は白雪の姫へではなく何故わたくしに贈るのか、と鏡を差し出すものに尋ねたが、そのものは姫様と別れるあなた様のために作った特別の鏡なのです、と言つ。

この鏡は是か否かの質問に答えることができるのです、と言つので妃は簡単な質問をしてみる。

わたくしは娘がいる、と尋ねると鏡は低い声では是、と答えた。

わたくしの娘は嫁いだ。

…是。

妃は鏡を受けとり、贈るものに褒美を与えた。白雪の姫は婚礼の翌日、狩人の新任地となる国境の街に住まいを移したとされる。新帝に嫁いだ桜の姫は桜后と呼ばれていた。

桜后の懷妊の知らせは王国にも伝わり、狩人の耳にも入った。

桜后は初産であることから故郷での出産を望み、新帝に願い出る。

産まれる子が男御子であればわたくしの生まれた国を訪れることがないでしょうし父や母に会うこともないでしょうから、

という桜后に新帝は泣る。

新帝は桜后を寵愛していたので手放したくはなかつた。

王都に戻りたいとは申しません、

国境に昔側仕えをしていた家臣の治める街があります、
わたくしの乳母もその街に住むと聞いています、

その街で産むことは叶いませんでしょうか、

という桜后の懇願に新帝は負け出産のための数月の滞在を許した。

桜后は輿に乗り大層な従者とともに国境へ着いた。

そして数十の侍女を連れて狩人の治める街に入つた。妃は鏡に問い合わせる。鏡よ鏡、わたくしの娘は健やかか、と。

鏡は答える。是、と。

鏡よ鏡、わたくしの娘は不自由してないか。是。

鏡よ鏡、わたくしの娘は夫に憎まれているか。否。

鏡よ鏡、わたくしの娘は夫に愛されているか。是。

日に幾度か問答が続き、あるとき妃は問い合わせた。鏡よ鏡、わたくしの娘は子を授かつたか、と。

鏡は答える。是、と。

妃は喜び急いで使いを出す。近々そちらへ伺おうと思つていると。

狩人が桜后の帰郷の知らせを受けたのは、妃からの使いがくる前日

だつた。

桜后を出迎えた狩人はどこか浮かぬ顔をしていた。

すぐに皇后歓迎の宴が用意されたが、狩人の表情に気付いた桜后は長旅の疲れを理由にそれを辞退した。

用意された自室に引き上げた桜后は狩人を呼び近しいもの以外を人

払いし、狩人に問い合わせる。

狩人は妃が白雪の姫を訪ねて来ることを打ち明け、白雪の姫が懷妊したと思っていることを告げた。

ばかな。

白雪の姫が懷妊など有り得ないでしょう、と桜后が言う。

狩人は妃がどこぞのものから鏡を手に入れたことを話す。

白雪の姫の真実が知れてしまう可能性も。

桜后はひとつ溜め息をつき、ではわたくしが白雪の姫として母様をお迎え致しましょう、と言う。

狩人はそれでは皇帝の御子を私の子と謀ることになります、と言つが桜后の言葉を聞き一の句が継げなくなる。

そのとき狩人に溢れた感情は恐怖と歓喜だった。

桜の姫は言った。

わたくしの子は、新帝の御子なのか貴方の子なのか、判らないのです、と。

白雪の人形姫、4（七の職人たち）

七の職人がいた。

匠たちはそれぞれ白雪の顔を作るもの、
髪を作るもの、
胴を作るもの、
腕を作るもの、
脚を作るもの、
衣装を縫うもの、
化粧をするものだった。

桜の姫は七の職人に白雪の姫へと繕つてもうう。面を焼き、白雪の肌へと化粧がされた。ふくよかな腹を締め付けない衣装が縫われ、桜の姫を型に懷妊中の白雪の姫の体が作られた。

桜の姫は七の職人に白雪の姫へと繕つてもうう。面を焼き、白雪の肌へと化粧がされた。ふくよかな腹を締め付けない衣装が縫われ、桜の姫を型に懷妊中の白雪の姫の体が作られた。

桜の姫は七の職人に白雪の姫へと繕つてもうう。面を焼き、白雪の肌へと化粧がされた。ふくよかな腹を締め付けない衣装が縫われ、桜の姫を型に懷妊中の白雪の姫の体が作られた。

桜の姫は七の職人に白雪の姫へと繕つてもうう。面を焼き、白雪の肌へと化粧がされた。ふくよかな腹を締め付けない衣装が縫われ、桜の姫を型に懷妊中の白雪の姫の体が作られた。

妃はそれでもこどもが産まれた証しが見たいと思い、臍の緒を送るよう命じた。

桜后は産まれた男御子の臍の緒を小箱に入れ、妃の元に送った。

臍の緒を受け取った妃は鏡に問う。

鏡よ鏡、これは娘の子の臍の緒か。
鏡は答える。

…是。

しばらくはそれで満足していた妃は再び御子に会いたくなる。
白雪の姫の元へ使いを出したが答えは同じだった。ならば、と妃は
御子の最初の髪をくれるよう命じる。
桜后は御子の髪を剃り、小箱に入れて妃の元へ届けた。

妃は鏡に問う。

鏡よ鏡、これは娘の子の髪か。

鏡は答える。

…是。

髪を手に入れた妃はしばらくはそれで満足していたが、より一層赤
子を見たくなる。再三の使いが出され、とうとう狩人は赤子は死ん
だ、と返答した。

返答の使いを帰してからすぐに妃から新たな使いが来た。使者は言
う。

ならば赤子の遺骸を届けよ、と。

狩人は思案し、七の職人に白雪の姫に似た男御子をあつらえさせる。

桜后は男御子を連れ新帝の元へ戻る。

送り届けられた白雪の姫の子の遺骸を手にした妃は、鏡に問う。

鏡よ鏡、これは娘の子の遺骸か。

鏡は答える。

…否。

鏡の答えを聞いた妃は抱いていた遺骸を落としてしまつ。ぱきいん、と澄んだ音がして布に包まれていた白雪の子は壊れた。顔や体の破片が散らばり、妃は呆然と両の手を見た。

…鏡よ鏡、わたくしの娘の子は狩人の元にいるのか。
…否。

急ぎ狩人の街へ向かつた妃は出迎える狩人に白雪の姫を出すようにと命じた。

狩人は妃の様子から替わり身が露見したことを知り、白雪の姫を抱き連れて来る。

椅子に座らせられた白雪の姫を見て妃は問う。

これは本当にわたくしの娘か。

白雪の姫でござります、と狩人が申し上げよつとしたとき知らぬ声がそれを遮つた。

…否。

やはり身代わりか、と咳く妃を見て妃が鏡を連れていたことを知る。

わたくしの娘はどこにいるのだ。

この方が白雪の姫でござります。

わたくしの娘の子はどこにいるのだ。

白雪の子はどこにもおつませぬ。

問答は繰り返され、妃は狩人を叱責した。狩人は観念してならば鏡にこの方が白雪の姫かをお尋ね下さいませ、と言つ。

鏡は答える。

…是。妃は崩れるように白雪の姫の残骸を抱き締める。

白雪の人形姫、5（嘘と眞実）

では動き語りわたくしに笑いかけた白雪はいつたい誰だというのだ。

狩人は言つ。

桜の姫でござります。

桜の姫。

その名に覚えがあつたが、桜の姫を抱き締めたり語りかけたりした覚えはなかつた。

妃は問う。

鏡よ鏡、わたくしの娘というのは桜の姫か。
鏡は答える。

…是。

桜の姫はどこにいるのだ、その問い合わせたのは鏡ではなく狩人だつた。

桜の姫は、いまは新帝の后、桜后ことおなりです。

ではあの腹の子は新帝の御子か。

はい、という声と否、という声が重なつた。

狩人の驚愕した顔を見、妃は悟る。

…そつか、あれはそなたの子か。

感慨深げに呟く妃は白雪の破片をひとつひとつ集め、衣装にくるみ

呴いた。

白雪の姫は、わたくしに似て体が弱かつた。

狩人たちが注意するなか、妃はしゃんと背を伸ばし朗々と言つた。
白雪が子もろともに亡くなつたのは惜しいこと。
しかしそなたたちに慈され、さぞ幸せだつたろう。
礼を言ひ。

城に戻つた妃は、白雪の姫と白雪の御子の残骸を並べ埋めた。二人の墓を見ながら妃は問う。

鏡よ鏡、王はわたくしを愛してくれているか。
是。

鏡よ鏡、家臣はわたくしに恨みないか。

是。

鏡よ鏡、娘は娘を愛してくれているか。
是。

鏡よ鏡、娘は娘を愛していたか。
是。

鏡よ鏡、桜の姫は皇帝に愛されているか。
是。

鏡よ鏡、桜后は帝国に愛されているか。

…是。

問答の後、妃は鏡を割った。そして破片を細かく砕き、海に流した。それからしばらくして妃は病床に着く。臨終のとき妃は形見分けのように自分のものを惜しみ無く家臣たちに譲る。妃は問いを残して死ぬがそれに答えるものはない。

：鏡よ鏡、桜の姫はいま幸せか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7124d/>

幻想童話

2010年10月16日00時06分発行